

徳川みらい学会第6回講演会

「家康公を育んだ駿府の今川文化」

静岡大学名誉教授 小和田哲男氏



徳川みらい学会の第6回講演会を2月3日(水)、静岡市民文化会館で開催しました。静岡大学名誉教授 小和田哲男氏から、戦国三大文化の1つである今川文化が家康公に与えた影響についてお話しいただきました。要旨は次のとおりです。

戦国大名として

先進的だった今川家

駿府の今川文化は、周防山口の大内文化や越前・乗谷の朝倉文化とともに戦国三大文化として知られています。その中でも特に今川文化は群を抜いて先進的なものでした。象徴的なものの一つに今川氏親が制定した分国法「今川仮名目録」と、その子義元の「仮名目録追加」が挙げられます。甲斐の武田氏の分国法「甲州法度之次第」にも影響を与えています。

駿河のほか遠江と三河まで勢力を伸ばし、東海道を手中に収めた今川家は、商品流通経済を重視した国づくりを行いました。今川家

が財政的に豊かであったのは、経済の発展があったためです。

その財政力をもって、文化政策を推進しました。公家との姻戚関係を持つことで京都風公家文化が駿府において花開きました。また、今川義元を育てた太原崇孚(雪斎)が家臣にいたことから臨済宗や曹洞宗といった禅宗系の寺院が多く禅宗文化が根付いたのです。

家康が「人質」となった理由

8歳になる竹千代が「人質」として今川家にやってきましたが、なぜ今川義元は雪斎を竹千代につけるなど、普通の人質とは違い優遇したのか。これには、竹千代を将来今川家の一翼を担う武將に育てたいという想いがあったのではないのでしょうか。子である今川氏真を補佐してくれる年齢の近い重臣を望んでいたのではと思われれます。

雪斎から学んだもの

「人質」の竹千代は雪斎から四書五経を学びますが、特に論語と孟

子が多いようでした。また、「武辺咄聞書(ぶへんばなしききがき)」によると武経七書と呼ばれる兵法書も学んでいます。戦での戦略や戦術のほか、為政者として上に立つものに必要な事柄もそこで学びました。例えば「六韜(りくとう)」には「天下は一人の天下にあらず、すなわち天下の天下なり」という記載がありますが、これは家康の名言として知られています。

今川家の文化的環境が家康に与えた影響

家康が天下を取り、武断政治から文治政治に大きく舵をきった背景には、「人質」時代の駿府における今川の文化的環境が関係しています。例えば「鷹狩り」。武家のものである鷹狩りですが、本来は公家文化である鷹狩りを、「人質」時代に持つていったのです。

他にも「書籍を刊行して世に伝へんは、仁政の第一なり」と「武野燭談」に記されているとおり、家康は伏見版・駿河版といわれる出版事業



に力を入れました。これは、雪斎が「聚分韻略(しゅうぶんいんりやく)」及び「歴代序略」といった木版を出版したことに影響を受けています。桶狭間の戦いの後、今川家は滅びていきますが、家康は儀式典礼を司るような高家として今川家を残しました。幼少時代、義元や雪斎から受けた恩義や教えを終生忘れないといった気持ちがあったのだと思います。



個人・法人会員を随時募集しています。皆さまのご入会をお待ちしております。

〈お問い合わせ〉 徳川みらい学会事務局 〈TEL〉 284-9660 〈HP〉 [徳川みらい学会](#) [検索](#)